**社会思想史学会第46回大会自由論題報告：報告書**

報告タイトル：アドリアーン・レーラントとレヴィヌス・ヴァルナーにおける「イスラーム以前のアラブ」理解

報告者：稲垣健太郎（コペンハーゲン大学神学部）

司会者：隠岐さや香先生（名古屋大学）

本報告は、18世紀ユトレヒトで活躍した東洋学者アドリアーン・レーラントの『ムハンマドの宗教について』（1st ed. 1705; 2nd ed. 1717）におけるクルアーン解釈とイスラーム以前のアラブを論じるものである。従来の研究はレーラントを、西欧の知識人たちが中世以来いだいてきたイスラームへの偏見から自由にイスラームを論じた、卓越した東洋学者と看做してきた。実に同著において彼は、アラビア語をはじめとする東洋諸語の知識を駆使し、西欧のみならずビザンツの神学者の議論を吟味し、彼らのイスラームへの誤解を解明している。本報告は、レーラントが参照する史資料に着目し、これらの史資料を彼がどのように解釈・利用し、それが思想史的にいかなる意義を持つのかを明らかにする近年の研究に棹さすものである。

　報告の前半では、レーラントが『ムハンマドの宗教について』の第二巻においてキリスト教徒がイスラームに対していだいてきたどのような臆見をいかなる文献や手稿に基づいて論駁したのかを確認した。とりわけ、既存のラテン語訳クルアーンに対してレーラントがいかなるクルアーン解釈を示したのかという論点を検討した。

　報告の後半では、レーラントが閲覧を望みながらも手にすることができなかった史料、すなわち、17世紀半ばのイスタンブールで活動したレヴィナス・ヴァルナーによる「ムハンマド以前のアラブ人の慣習」に関する論考を議論の俎上に載せた。レーラントが失われたと記すこのヴァルナーの手稿は現在もライデン大学図書館にOr. 1131として保管されている。この手稿の分析が示唆するのは、アラビア語写本を渉猟し、クルアーンやハディースとその注釈の読解に基づいてイスラームが成立した文脈を詳細に描くヴァルナーが、レーラントの方法を先取りしていたことである。さらに本報告は、仮説的ではあれ、イスラーム以前のアラブ」という参照枠組みをもとにヴァルナーはイスラームを史的文脈に位置付け、そしてこの試みをレーラントもまた重視していた、という結論を提示した。

　質疑応答では、17-18世紀西欧の東洋学における方法論の転換を示すような論争の有無やヴァルナーとレーラントがそもそも「イスラーム以前のアラブ」を論及した動機、さらにヴァルナーとレーラントが「イスラーム以前のアラブ」という観点からクルアーンの文献学的研究にも関心を示したか、という論点が提示された。現在執筆中の博士論文を発展させるうえで非常に重要な問いをいただけたことを感謝いたします。

　17-18世紀西欧のイスラーム史研究における方法論の転換につき、とりわけ18世紀ドイツの東洋学者ヨハン・ヤコプ・ライスケの功績が重要であるという仮説を立てており、現在コペンハーゲンの王立図書館に所蔵されているライスケの手稿の分析を進めている。2点目の「イスラーム以前のアラブ」を論及した動機に関しては、レーラントは、ムハンマドに帰されてきた慣習が実際はイスラーム以前から実践されていたことを明らかにすることで、イスラームに関する誤謬や臆見を正すことを目指したと考えられる。他方でヴァルナーに関しては、ライデンやイスタンブールでの知識人たちとの交流によって動機付けられたという仮説に並んで、イスラームの起源、すなわちイスラームがいかなる歴史的・文化的・宗教的文脈において成立したかを探究するという関心があったように思われる。3点目に関しては、レーラントとヴァルナーの所有したクルアーンの写本の欄外書き込みの有無を調査した範囲では、テクストの異同などに対する文献学的研究の痕跡を確認できていないものの、ライデン大学に所蔵されているヴァルナーの手稿をさらに読み進めることで、この論点をさらに深めることができると考えている。